

事業区分	文化芸術事業		育成・創造事業				
事業名	高校生のためのコミュニケーション事業 ①コミュニケーションワークショップ ②高校生のための演劇スクール						
目的・内容	【使 命】文化人口の拡大とレベルアップ、多彩な人材育成とキャリア開発、子どもの文化芸術活動の推進 【事業の柱】学校との連携による子どもや青少年のための文化芸術体験活動の充実 ①高校演劇部新入部員に対し、主体的に演劇創造に携わるための基礎訓練を行い、意識啓発を図り、レベルアップに繋げる。また、演劇の実際の創造現場を体験することで、演劇表現の基盤であるコミュニケーション能力及び創造力を育成する。本事業を通じて、演劇人口の少ない本県において、次代を担う演劇活動者の育成と演劇人口の拡大を図る。併せて、顧問へ指導者の役割、指導方法について認識を促す。 ②鳥取県内の高校演劇部員及びその顧問を対象に、高校演劇の第一線で活躍している指導者の指導の下、実際の創作現場を体験しながら県内高校演劇のレベルアップ、人材の育成を図る。						
開催日	①高校生のためのコミュニケーションワークショップ 平成25年4月27日(土)／西部、5月18日(土)／中部、19(日)／東部 講師:西垣 耕造(俳優・東京演劇集団風所属) ②高校生のための演劇スクール 平成25年12月26日(木)、平成26年1月11日(土)～13日(月・祝) 講師:畑澤聖悟(青森県立青森中央高校教諭・演劇部顧問)						
会場	①高校生のためのコミュニケーションワークショップ 中部地区／倉吉未来中心リハーサル室 東部地区／山の手体育館 西部地区／ふれあいの里大会議室		②高校生のための演劇スクール 米子市文化ホールイベントホール12/26 米子市児童文化センター多目的ホール1/11～13				
参加費	① 無 料 ② 1,000円						
実施状況	参加者数	①高校演劇WS/目標 90名(各地区30名) 生徒94名(13校) 顧問9名(9校) ・中部地区 生徒15名(2校) 顧問2名 ・東部地区 生徒31名(4校) 顧問4名 ・西部地区 生徒48名(7校) 顧問4名	②高校生のための演劇School/目標(募集) 30名 生徒 9校 35名(顧問12名参加) ※模擬公演来場者 105名				
事業費状況	予算額	収入	30,000円	支出	1,235,000円	収支比率	2.4%
	決算額	収入	33,000円	支出	1,053,057円	収支比率	3.1%
参加者アンケート(主なもの)	①コミュニケーションワークショップ ・プロの指導を受けられたことで、演劇に対する視野が広がりました。 ・いろいろな学校の方と交流でき、自分の輪が広がりました。 ・演技をするうえで、まずは相手を受容することの大切さ、遊ぶ心の大切さがわかってよかったです。 ・最後のグループポエム、みんなの言葉が繋がったときには感動しました。 ②演劇スクール ・普段の部活動で学べないことをたくさん学ぶことが出来て良かった。他に他校の生徒達からもいろいろと学ぶことが出来たし、普段の先生以外に教えてもらったことは新鮮で良かった。 ・すごく熱気あふれるこの企画の中で、自分では気づけなかったクセや演劇の役者の見え方など、知らなかったことをたくさん知りました。 ・他の学校の人と仲良くなれたし、無茶な挑戦を共有できて楽しかった。いつもの自分にはない役が出来て良かったし、自分はまだまだだと改めて知ることができた。 ・高校生の導き方を学ばせていただいたことが良かった。特に限られた時間の中で、演技や演出意図の理解について力を伸ばすにはどうすれば良いか、参考になることを多く学ばせていただいた。(顧問)						
1次評価(内部)	[成果] ①コミュニケーションワークショップ ・演劇を学ぶというよりもコミュニケーションを学ぶという意識を講師、高校生、主催ともに確認することができ、対象を広げた本事業の新しいスタートとなった。 ・ワークショップは、楽しい中にもしっかりと学びの場面がちりばめられ、生徒、顧問ともに評価の高い内容であった。参加した高校生からは、楽しかったという声のほか、自分を見つめ直す声や、周りの人との関わりを再確認する声が聞かれた。講師がひとつひとつのワークショップにきちんと意義を持ち説明されるので、高校生もしっかりそれを受け止めていた。 ②演劇スクール ・昨年度に続き顧問の先生方にご協力いただく場面があった。そのため、トップレベルの指導者による指導を、生徒だけでなく顧問も体験することができた。 [課題等] ・演劇によるコミュニケーションワークショップを演劇部だけでなく、すべての高校生を対象とした試験的試みの事業として実施した。結果、演劇部以外の参加はなかったが、現代の青少年にとってコミュニケーション力を養うことの意義や必要性を伝えていくことが、ワークショップそのものの事業を実施する前に必要だったかもしれない。(ワークショップ) ・年々参加希望者が増加している当該事業において、人数の選定が非常に難しくなってくる。今年度は学校毎に定員数を定めたが、更に学年指定もしなければならない。(スクール) ・参加校が定着化してきていることから、今まで参加実績のない学校の開発が必要である。(スクール)						
2次評価(財団評議員)	[事業概要] ・これまでの高校演劇スクールから脱皮し、演劇表現の基盤を見つめなおす事業の方向性と、演劇界の他にも拡大しようとする新しい広がりを評価したい。 [事業プロセス] ・事業のコンセプトを学校、講師と確認の上で参加者に対応できるようにしたのは良かったと思う。「演劇を学ぶ」と「コミュニケーション」がどう関連するのか、事前に対象の高校生にしっかり伝え参加を促すことが望まれる。 [成果] ・事業の様子から、参加者の意欲や懸念さが伝わって来た。演劇部顧問の先生もたくさん立ち会っておられ、この事業への理解や協力が得られているように感じた。今後良い連携が出来ればと期待している。 [課題等] ・演劇スクールでは、参加の高校生全員が生き生きしていた。講師の個性を引き出すアドバイスも興味深かった。演劇創造を通じて表現力、想像力、コミュニケーション力を養うという点においては、講師の力量によるものが大きいと感じた。参加対象を広げていくな、コミュニケーションワークショップからでも体験を勧めてほしい。						
今後の対応、取組状況	①コミュニケーションワークショップ ・演劇という、ひとつの芸術分野の持つコミュニケーション力は、人々が生活する上で非常に重要な能力であり、今まさに社会が求める要素であることを、まずは継続的に伝えていくことが必要。高校生というひとつの年代を対象にしつつも、そこに留めず伝えていくことを実施していくべきかもしれない。現在、全国的な傾向として演劇コミュニケーションワークショップの企業や組織からのニーズが急増している現状も生まれている。 ②演劇スクール ・学校については、学校間、学校と財団と良い関係が築きあげられつつあり、今後数年は同じ形態で事業を推進していくことが良いと感じる。 ・一般演劇活動者(団体)については、現在そう活発な状態ではないと思われる。しかしその中でも継続的・意欲的に活動している劇団もあり、それらをうまくこの高校演劇の事業に運動させていくことが将来的な県の演劇活性化に繋がると感じる。						